

進野久五郎 (1900~1984) による万葉植物研究  
— 越中で詠まれた葦附、堅香子、および都萬麻の研究史に関連して —

山内健生<sup>1)</sup>・石原貴子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>富山県衛生研究所 〒939-0363 富山県射水市中太閤山17-1

<sup>2)</sup>〒699-0110 島根県松江市東出雲町錦新町7丁目6-6-102

Studies of the Manyo plant by Kyugoro Shinno (1900-1984):  
with the historical review of “Ashitsuki”, “Katakago”, and “Tsumama” in Etchu Province

Takeo Yamauchi<sup>1)</sup> and Takako Ishihara<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Toyama Institute of Health, 17-1 Nakataikoyama, Imizu, Toyama, 939-0363 Japan

<sup>2)</sup>7-6-6-102 Nishikishin-machi, Higashiizumo-cho, Matsue, Shimane, 699-0110 Japan

要旨：進野久五郎は、山形県出身の植物学者で、富山県をフィールドとして幅広く研究を行なった。進野は、『万葉集』の歌人 大伴家持が越中で歌に詠んだ植物の研究に関して第一人者であったとされるが、具体的にどのような研究をしたのかは明確にされておらず、後の研究者による再評価もなされていなかった。そこで、越中の万葉植物である葦附、堅香子、および都萬麻に関する研究史を整理し、進野による研究の独創性や万葉植物研究史における位置づけなどについて調査した。その結果、進野が支持した説はいずれも現在主流となっている説であることが明らかとなった。その他、万葉植物の教育普及活動や保全における進野の功績についても述べた。

はじめに

進野久五郎 (旧姓：池田、1900~1984、図1) は、富山県の植物について幅広く研究を行なった植物学者である。進野は1900年 (明治33年) 11月7日に山形県で生まれ、広島高等師範学校 (現在の広島大学教育学部) 附設教員養成所博物科で学んだ。在学時代には、阿部余四男 (1891~1960、専門は哺乳類の分類学など) と神田正悌 (生没年不明、専門は植物学) の両教授による指導を受け、1924年 (大正13年) に卒業した。同年4月に富山県立富山中学校 (現在の富山県立富山高等学校) の博物 (現在の生物と地学を含む授業科目) 担当の教諭として富山県へ赴任し、この地に永住した。赴任後、広島高等師範学校 (以下、広島高師) の先輩であり富山県女子師範学校 (現在の富山大学人間発達科学部) 教諭であった菊池勘左衛門 (1895~1980、専門は貝類と甲殻類十脚目の分類学) から指導を受け、富山県の生物について学ん

でいった (進野, 1957, 1980 a, 1980 b)。

進野が富山県の理科教育に残した功績はきわめて大きく、『富山大百科事典』 (長井, 1994)、『越中人譚』 (長井, 2001)、『とやまの教育を築いた人たち』 (笹原, 2003) といった書籍でも進野の功績が紹介されている。進野が富山に着任した翌年の1925年 (大正14年)、広島高師博物科の先輩菊池勘左衛門および後輩 大宮司 (千葉) 清治 (生没年不明、当時富山県師範学校、後に川崎市教育長) と3人で相計り、さらに広島高師博物科の大先輩である中田



図1 進野久五郎

栄太郎（1886～1977、後に衆議院議員）とも相談して、富山博物学会（現在の富山県生物学会）を創設した。この会には小中等教員並びに試験場その他の同好者が集まり、学究と親睦のため、例会、研究発表会、採集会が定期的に開催された。後に菊池が初代会長を務め、菊池が佐渡へ移った後は進野が2代会長を務めた（進野，1957；菊池，1977；進野，1980 a，1980 b）。進野は、1928年（昭和3年）に富山県師範学校（現在の富山大学人間発達科学部）訓導（後に教授）、1944年（昭和19年）に富山県科学教育研究所所長、1951年（昭和26年）に富山県立中部高等学校校長、1958年（昭和33年）に富山県上市町教育長と、教育に関する数々の要職を歴任した（以上、主として、太田，1987；長井，1994，2001；大場，2007）。

教育者であった進野は、多くの後進を育成したことで知られている（図2）。長井（2001）は進野について「背が高く品のよい物腰のやわらかい紳士」、「身近な自然現象を教材に取り入れ、講義を進めるのが常であった」、「学生たちは授業に魅かれ、久五郎を『植物の進野先生』と呼んで尊敬した」と述べており、進野が魅力的な教師であった様子がうかがえる。進野は植物学者であったが、化石（進野，1929）、方言と民俗（進野，1940）、海洋生物（進野，1957，1980 a，1980 b）など幅広い分野に造詣が深かったため、進野の授業に魅了されて博物学にのめり込んだ学生も少なくなっただろう。富山県師範学校（以下、富山師範）の教え子である米山 穰（1911～1989、後に広島大学教授）は、「私が広島高師に学ぶようになって帰省のおり先生のお宅をお伺いすると、いつ行ってみても富師の専攻科生、または卒業生の寝泊りの宿のようで、いつも研修会場のようであり、活気が溢れていた」と回想している（米山，1985）。こうした富山師範時代の教え子として、物理の戸田清次（1910～1998）、初等理科の丸本喜一（1910～1998）、植物の本多啓七（1912～2003）、昆虫の田中忠治（1912～1993）、天文の増田正之（1912～2003）など、後に富山県の理科教育を担う多くの後進を育成したことは特筆に値する（富山の科学教育バーチャル資料館ウェブサイトより）。

また、富山県を離れて活躍した動物学者 大塚外次（1913～1961）も富山師範時代の教え子で、進野の影響を強く受けた人物である（山内，2013）。進野の死の翌年、雑誌『富山教育』の747号で「進野久五郎先生を偲ぶ」という特集が生まれ、進野の教え子ら15名が生前の思い出を綴った（例えば、高松，1985；米山，1985）。

教育者としての一面が強い進野であるが、彼が富山県の植物相解明に果たした役割は小さくない。進野は、自ら県内各地の山野へ分け入り、植物相の解明に努めた（進野，1973；太田，1987など）。長女 政枝の回想には「富山師範時代の父は、暇さえあれば植物採集に出かけました。五・六名の学生と一緒にの時も、単独行もあり、帰りはいつも夜になってからで、地下足袋は泥まみれでした」とある（政枝，1985）。日本の植物分類学の父とされる牧野富太郎（1862～1957）に師事し、自分で疑問を持つと折あるごとに東京都練馬区の牧野の自宅を訪ねて教を乞うていた（政枝，1985；山本・田中，2005）。しかし、このようにして進野が集めた植物標本数万点と貴重な蔵書のすべては、疎開前日であった1945年（昭和20年）8月1日の富山空襲で灰燼に帰した（高松，1985；長井，2001）。1946年（昭和21年）以後に集められた標本、写真、文献は富山市科学文化センター（現在の富山市科学博物館）に寄贈され、標本目録が『進野久五郎植物コレクション』（太田，1987）と



図2 進野久五郎の家族と富山県師範学校乙組一同（1932年4月17日撮影）。前列左端が進野久五郎、前列右端は進野の長女 政枝、2番目は大塚外次、中列右端は妻 貞子（写真は大塚あつ子氏所蔵）

して出版されている。

進野の興味関心は幅広く、『万葉集』の歌人 大伴家持（718～785）が越中で歌に詠んだ植物の研究に関しても第一人者であった（長井，2001；笹原，2003）。『万葉集』は、現存する日本最古の歌集で、20巻から成り、約4500首が収録されている。成立、編纂者については不明だが、現存の形に近いものに最後にまとめたのは大伴家持で、成立は奈良時代の末頃とされる。作者層は、天皇、皇族、貴族、官人、防人、遊女、乞食者などと広く、東国民謡ともいわれる東歌なども収められている（日本国語第二版編集委員会ほか，2001）。大伴家持は奈良時代を代表する歌人の1人である。地方、中央の諸官を歴任し、746年（天平18年）7月から751年（天平勝宝3年）7月に帰京するまでの5年間、越中守として赴任した。『万葉集』に収められている家持の歌は、この時期に作られたものが多い（佐竹ら，2003）。

富山県では万葉植物の専門家として知られる進野であるが、彼が万葉植物について具体的にどのような研究をしたのかは明確でなく、後の研究者による再評価もなされていない。そこで、越中の万葉植物に関して進野が執筆した1937年の論文「万葉植物 葦附・堅香子・都萬麻」（図3 A、この論文は1971年に出版された単行本『越中の万葉』および1976年に出版された単行本『葦附誌』の中に表題を「家持と越中の植物」と変えて再録されている）および1973年に出版された著書『富山の植物一風土と四季を訪ねて』（図3 B）の中の万



図3 万葉集に関する進野の著作物。A：「万葉植物 葦附・堅香子・都萬麻」の別刷り（富山県立図書館所蔵）の表紙、B：『富山の植物一風土と四季を訪ねて』の表紙

葉植物：葦附、堅香子、および都萬麻の記述の独創性や万葉植物研究における進野の著作物の位置づけなどを調査した。奇しくも今年（2014年）は進野の没後30年という区切りの年であるので、この小文をきっかけに、進野の業績に関心を持つ方が1人でも増えたなら幸いである。

## 葦附

となみのこほり そかみ かほべ  
礪波郡の雄神の河辺にして作りし歌一首  
そかみ くれなる をとめ あしつき みる  
雄神川 紅 にほふ娘子らし葦付 水松の類 取ると  
瀬に立たすらし（巻十七・四〇二一）

雄神川は紅色に輝いている。少女らが葦付〈水松の類である〉を採ろうと川瀬に立っておられるらしい。（新日本古典文学大系『万葉集四』）

この歌は、748年（天平20年）春、大伴家持が越中の国守として春の出挙の政務のために国内全郡を巡行した時に詠んだ歌である。「出挙」とは、種々の不足する農家に国庫から貸し付け、秋の収穫時に利息を付けて返済させる制度である。『コレクション日本歌人選042 大伴家持』（小野，2013）によると、この時の巡行では、国府を出発してまず礪波郡に入り政務を終えて次の婦負郡に行く道中で雄神川（現在の庄川中上流域と考えられている）を渡った。その時に雄神川のほとりで家持が詠んだ歌がこれである。

ここで詠まれた葦附という植物は『万葉集』の中でこの歌にのみ登場し、その正体は長らく不明とされてきた。江戸時代以降に4つの説（表1）が提唱され、現在ではアシツキノリ説（小泉，1919）が有力である。以下に、この葦附について江戸時代以降どのような研究がなされ、また進野の見解がどのようなものであったのか述べる。

表1 葦附として想定された植物

想定された植物	初出文献
ムギ	賀茂（1768頃）
スイゼンジノリ	遠藤（1911）
アシツキノリ	小泉（1919）
カワモズク類	和田（1966）

江戸の国学者であった賀茂真淵（1697～1769）は、『万葉集卷十七之考』（賀茂，1768頃a）の中で、葦附について「今本こ、に水松之類とあるは心ゆかず 水松は海松なれば用にあるべからず 菱の壳にて足つく事あれば菱の子を足突といふべし すべて此に注は自の注とも見えぬ事あるは既にもいへり」と説明している。つまり、賀茂真淵は、その音から葦附は「足突」の借字であり、菱殻（麦）のことであると考えていたことが分かる。

大伴家持によって葦附の歌が詠まれた富山県東砺波郡の庄川中上流域では、古くからアシヅキ（葦附）およびイシヅキ（石附）と呼ばれる藍藻類が食用として用いられてきた。それらには水中のみならず陸上に発生する藍藻類も含まれ、しかも両者は明確に区別されていたわけではなく、人によって名称の使用法がまちまちであった（高島，1976）。葦附は『万葉集』で歌われたため有名であった（小泉，1919）が、当地でアシヅキ（葦附）およびイシヅキ（石附）と呼ばれていた藍藻類が科学的に研究されたことはなかった。

札幌農学校（現在の北海道大学）の教授で海藻研究の大家であった遠藤吉三郎（1874～1921）は、1910年（明治43年）7月に教え子の市島宇八（1892?～1941以前）が富山県へ帰省する際に葦附採集を依頼し、市島は葦附の生息地を知らなかったが人の協力により東砺波郡中田町でこれを得て遠藤への土産とした（市島，1929，1976）。翌年、遠藤は『海産植物学』（遠藤，1911）において、藍藻類の一種である水前寺苔の項目に「越中射水郡庄川ノ石礫又ハ葦ノ葉茎等ニ着生スル葦附苔モ多分同一物ナルベク」と解説した。つまり、遠藤は、庄川の葦附苔と呼ばれる藍藻類を水前寺苔（スイゼンジノリ *Aphanothece sacrum*）と同一種とみなしたのであった。これはおそらく、市島が遠藤へ提供した藍藻類が、大伴家持が詠んだ「瀬」に入らなければ採れない真の葦附ではなかったためだと推測される。

1918年（大正7年）に富山県立砺波中学校（現在の富山県立砺波高等学校）教諭で博物を担当していた御旅屋太作（1881～1942）が清水の流れる川底の小石に付着する葦附苔と九州に産するスイ

ゼンジノリの比較形態学的研究を行い、細胞の配列が異なることから両者は別種であると確信し、さらに、御旅屋から葦附苔の同定を依頼された海藻学者の岡村金太郎（1867～1935）は、葦附苔はネンジュモ属であるためスイゼンジノリと別属であるとの見解を示した（御旅屋，1922）。1919年（大正8年）7月31日、京都帝国大学植物学教室の小泉源一（1883～1953）は、御旅屋に案内されて葦附苔の生育地を訪れ、その実物について研究した。そして、同年10月に「葦附苔」という短報を『植物学雑誌』に発表し、この藍藻類はグリーンランド、北米、西インド諸島、ハワイなどに分布する *Nostoc verrucosum* と同種であると述べた（小泉，1919）。これに基づき、御旅屋は、1922年（大正11年）6月出版の『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』で葦附苔（アシツキノリ）*N. verrucosum* の分類、生態、分布などについて詳しく述べ、形態を初めて図示した（御旅屋，1922）。御旅屋（1922）では、先の論文（小泉，1919）で和名を「葦附」ではなく「葦附苔」とした経緯（語調が悪いからという理由で、小泉と御旅屋とで命名した）も述べられている。なお、後に出版された文献には、この2人が共著で『植物学雑誌』に論文を発表したかのような記述が多々みられるのだが、実際は小泉の単著であった。

富山県水産講習所（現在の富山県農林水産総合技術センター水産研究所）の技手であった市島宇八（前述）は1928年（昭和3年）に東砺波郡北般若石代にて「イシヅキ」あるいは「アシツキ」と呼ばれている藍藻類を調査した結果、葦附苔（アシツキノリ）*N. verrucosum*、イシクラゲ *N. commune*、スイゼンジノリ *Aphanothece sacrum* (*Phyllocladus* 属として記述) の3種が得られたことを報告した（市島，1929，1976）。ここで注意すべきは、当地で「イシヅキ」あるいは「アシツキ」と呼ばれる藍藻類は、水中に発生するもののみならず陸上で発生するものをも含む（高島，1976）ことである。おそらく、市島は川底に発生する真のアシツキノリだけではなく他の藍藻類をも採集したため、このような結果になったものと推測される。

第四高等学校（現在の金沢大学）の教授であった国文学者の鴻巣盛広（1882?～1940）は、1931年（昭和6年）8月5日に東砺波郡北般若村を訪れてアシツキノリを調査した。そして、『北陸万葉集古蹟研究』（鴻巣，1934a）ならびに『万葉集全釈第五冊』（鴻巣，1934b）の中で葦附の研究者として御旅屋の名前を挙げ、彼の報告（御旅屋，1922）を詳しく引用した。その結果、アシツキノリ説が広く世に知られることとなった。植物文学者の松田修（1903～1990）も1933年（昭和8年）夏に当地を訪れて調査を行ない、アシツキノリ説を認めた（松田，1934）。なお、岡村金太郎（前述）は大著『日本海藻誌』（岡村，1936）の中で、従来そのままアシツキという和名で本種を図示した。

進野も一連の著作（進野，1936，1937，1960，1973）の中で、アシツキノリ説を支持している。進野（1936，1937，1973）では、これまでの葦附をめぐる研究史を整理し、植物学的な解説を加え、さらに富山県内における分布状況を示した。この際、射水郡浅井村にも本種が分布することを新たに示した。さらに、形態が類似するイシクラゲ *N. commune*、およびスイゼンジノリと同属の藻類についても県内の分布状況を述べた。

1938年（昭和13年）に、京都帝国大学植物学教室の藍藻類学者 米田勇一（1907～1977）が現地（北般若村、中田町）の発生状態について視察研究した結果、確実に *N. verrucosum* が分布していることを『植物分類・地理』に発表した（Yoneda，1939）。

富山大学教育学部の和田徳一（1900～1980）は、アシツキノリの繁殖時期が和歌の詠まれた家持の巡行の時期に合わないことなど4つの矛盾点を挙げてアシツキノリ説に反論し、川もずく説を新たに提唱した（和田，1966，1967）。川もずくとは、紅藻類カワモズク目カワモズク科の淡水藻類の総称である。実際は江戸時代後期の『万葉集名物考』（著者、成立年は共に未詳）に川もずく説が述べられている（和田，1966，1967）ため、和田はこの説の再発見者というべきかもしれない。和田（1966）には、川もずく説について「県生物学会

会長進野久五郎氏などから賛意を表せられ」とある。しかし、『葦附誌』に再掲された和田の論文（和田，1976）の脚注では、この賛意について「転換した面白い着想という意」との補足が加えられている。この後の進野の著作（進野，1971，1973）においてもアシツキノリ説が採用されており、川もずく説は触れられてすらいない。また、『万葉集注釈第十七』（澤瀉，1967）でも、川もずく説については「なお考慮すべき異説」とある。

清田（1967，1969，2005）では、川もずく説の不備が挙げられ、アシツキノリ説を支持する見解が示された。また、松永（1988）にも、1983年（昭和58年）に万葉植物の研究者である東北女子大学教授の長田貞雄（?～2000?）は和田がアシツキノリ説の矛盾点として挙げた4点全てに反論しアシツキノリ説を支持する論文を執筆する予定であるとの記述がある。

水上（1999）では、実際にアシツキノリの生態を観察し、本種は14℃前後の湧水を好むが条件が良ければ一年中見られることが示された。同様に、藤田（2013）では、「筆者は植物学について門外漢である」としながらも、富山県内での調査に基づき、冬季にも十分に食用になるアシツキノリの繁茂がみられることが示された。

料理人である経沢信弘は、実際に富山県内でアシツキノリとカワモズクを採集し、調理して食した結果、アシツキノリは食用に適するのに対してカワモズクは食感が悪く食用に向かないと述べ、アシツキノリ説を支持した（経沢，2013）。

『万葉集をつくった大伴家持大事典』（小野，2010）では「アシツキノリ説（御旅屋太作）やカワモズク説（和田徳一）など諸説があり、未だ定説をみない」と慎重な記述がなされているが、近年ではアシツキノリ説を支持する意見が圧倒的に多いといえる。

## 堅香子

かたかご草の花をよそを攀ち折りし歌一首

もののふの八十をとめらが汲みまがふ寺井の上  
の堅香子の花（巻十九・四一四三）

(もののふの) たくさんの乙女らがいり乱れて  
汲みあう、御寺の井戸ばたのカタクリの花よ。

(新日本古典文学大系『万葉集四』)

『コレクション日本歌人選042 大伴家持』(小野, 2013)によると、この歌は、750年(天平勝宝2年)3月2日に、越中国府の近くにあるお寺の井戸に水を汲みに来ていた女性たちの様子を家持が見て詠んだものである。ここでの「もののふ」という言葉は、「八十」にかけて使われており、「もののふ」そのものに意味はない。

同じく小野(2013)によると、堅香子は平安時代から鎌倉時代初期まで「カタカシ」と訓まれていた。しかし、当時はその「カタカシの花」が何であるのかは分からなかった。鎌倉時代に入り、天台宗の学問僧であった仙覚(1203?~?)が『万葉集註釈』(仙覚, 1269頃)において、新訓として初めて「堅香子」をカタカコと改めた。そのカタカコを今のカタクリと想定したのは江戸時代の賀茂真淵である。このことは、『万葉集卷十九之考』(賀茂, 1768頃b)において「今云かたくりなるべし此花はすみれ草の花に似ても、色なるが見るかひ有花なればとりてめづべし 越の國にてはかたかごといふ」と説明されている。このようにして、堅香子という名前でも詠まれた植物の正体については、賀茂(1768頃b)以降、カタクリ説が統一見解となっていた。なお、カタクリ *Erythronium japonicum* は、ユリ科の多年草で、4~6月に開花する。

進野も終始一貫して「カタクリ」説を支持しており、『古今要覧稿』(屋代, 1907)を引用して堅香子という名前がカタクリの特徴をよくとらえたもので植物学的に理にかなっていることを述べた。

表2 堅香子として想定された植物

想定された植物	備考
カタクリ	初出は仙覚(1269頃)
コバイモ類	初出は前川(1973)
シュンラン類	初出は堀(2002)
ウバユリ	『富山大百科事典』(塩谷, 1994a)を参照

また、「伏木町古国府のうしろ清水を囲む斜面に今尚春を飾る花のひとつとなっている」と述べ、大伴家持が歌を詠んだと考えられる場所に1100年以上時を経た現代もカタクリが生息し続けていることに触れた。

前述のとおり、堅香子については、賀茂(1768頃b)以降カタクリ説が統一見解となっていたのだが、戦後になって新たな説が提唱されたので、以下に新説の概略を述べておく。

東京大学名誉教授で植物学者の前川文夫(1908~1984)は、その著書『植物の名前の話』(前川, 1981)に、1973年(昭和48年)に前川が『どるめん』1号に発表した「カタカゴの正体」という論文を再掲し、コバイモ説を提唱した。コバイモ類はユリ科の多年草で、花は3月下旬から5月に咲く。前川(1981)の中では、「また『古今要覧稿』にあるとして、進野久五郎が、堅は片でこの草がはじめは片葉であること、葉の表面にだんだら模様のあることを前にのべたが、香子はこの模様のことで本来はカノコ(鹿子)の宛字だろうとする解釈を出されている。今のカタクリがカタカゴの原植物であるとの前提に立っての解釈である、たいへん穿っている、むしろ穿ちすぎているようにさえ思える」と進野の見解について一定の評価をしつつも結論は否定している。

大阪産業大学教養部助教授で日本語学が専門の堀勝博は、「堅香子」について蘭説を提唱した(堀, 2002)。ちなみに、ここでいう「蘭」が今日の何を指すかには諸説あるが、堀は「蘭花」すなわちシュンラン *Cymbidium goeringii* の類と推定している。シュンランはラン科で、花は3~4月に咲く。

以上の説を整理すると表2のようになる。新たにコバイモ説(前川, 1973)と蘭説(堀, 2002)が提唱されはしたが、それ以降もカタクリ説を採用した文献が圧倒的に多く(例えば、森, 1984; 山口, 1985; 武部, 1990; 塩谷, 1994a; 山田・中嶋, 1995; 大貫, 1998; 霜野, 2001; 郷右近, 2003; 佐竹ら, 2003; 大貫, 2005; 坂本, 2013)、本説が定説となっている。

## 都萬麻

季春三月九日、出挙の政に、旧江村に行かむと  
 するに、道の上に物花を囑目せし詠。興中に作  
 りし所の歌を併せたり洪谿の埼を過ぎて巖の上  
 の樹を見し歌一首 樹の名は都萬麻

磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし  
 神さびにけり（巻十九・四一五九）

磯の上のつままを見ると、根をのばして歳月を  
 深く経ているらしい。神々しいさまだ。

（新日本古典文学大系『万葉集四』）

『コレクション日本歌人選042 大伴家持』（小  
 野，2013）によると、この歌は750年（天平勝宝  
 2年）3月9日に、政務で国府の隣の古江村へ行  
 くため洪谿の崎を通った時に目に止まった「つま  
 ま」と呼ばれる木を詠んだものである。「樹の名  
 は都萬麻」と詞書にあるところからも、おそらく  
 家持はその時初めて「つまま」を見たに違いない。

ここで詠まれた都萬麻という植物は『万葉集』  
 の中でこの歌にのみ登場し、その正体は長らく不  
 明とされてきた。白井（1933）によると、『万葉  
 集代匠記』（契沖，1690）、『万葉品類抄』（荒木田，  
 1834）、『万葉集古義品物解』（鹿持，1898）、『万  
 葉集名物考』（著者、成立年は共に未詳）、『万葉

集植物考』（豊田，1931）などは、いずれも都萬  
 麻の正体を未詳としている。その一方で、マツ説  
 （曾，江戸時代後期）、ハマヒサカキ説（畔田，18  
 43）、タブノキ説（山本，1926）、ヤブニッケイ説  
 （山本，1926）、シロダモ説（山本，1926）、イヌ  
 ツゲ説（白井，1933）、ツタウルシ説（田邊，  
 1942）などといった説が提唱されてきた（表3）。

これらのうち、現在定説となっているのがタブ  
 ノキ説（山本，1926）である。タブノキ *Machilus  
 thunbergii* は常緑高木で、照葉樹林の代表的樹  
 種のひとつであり、とくに海岸近くに多い。本草  
 学者 山本章夫（1826?～1903）が記し、彼の死  
 後に出版された著書『万葉古今動植正名』（山本，  
 1926）によると、越中国射水郡洪谷村の岩崎とい  
 うところに、「つまま」の木であるとして小木を  
 植え、記念石を建てた人がいたが、いつのことな  
 のか誰のことなのかは不明とのことである。この  
 葉が「だも」に似ていたという話に基づき、タブ  
 ノキ（ダモ）説、ヤブニッケイ（クロダモ）説、  
 シロダモ説が提唱された（山本，1926）。この話  
 については『樹木和名考』（白井，1933）で詳細  
 が述べられているので、以下に記す。白井  
 （1933）によると、安政年間越中射水郡太田村の  
 大島宗九郎が路傍にこの木1本を植えて石碑を建

表3 都萬麻として想定された植物

想定された植物	備考
マツ（相生の松、夫婦松の類）	初出は『國史草木昆虫攷』（曾，江戸時代後期）
ハマヒサカキ（磯ムマベ、イツチヂミ）	初出は『古名録』（畔田，1843-1937）
タブノキ（ダモ、イヌグス）	初出は『心の花』（松居，出版年不明）あるいは『万葉古今動植正名』（山本，1926）
ヤブニッケイ（クロダモ）	初出は『万葉古今動植正名』（山本，1926）
シロダモ	初出は『万葉古今動植正名』（山本，1926）
イヌツゲ	初出は『樹木和名考』（白井，1933）
ツタウルシ	初出は『越中万葉かたかごの花』（田辺，1942）
ホソバタバ	『富山大百科事典』（塩谷，1994 b）を参照
イヌガシ	『富山大百科事典』（塩谷，1994 b）、『万葉植物事典』（大貫，1998）を参照
アオガシ	『日本国語大辞典』の補注を参照

てたということを、1912年（大正元年）に富山高  
等女学校教授の松井巖夫からの書面で知ったとあ  
る。『北陸万葉集古蹟研究』（鴻巣，1934 a）には  
以下の通り、さらに詳しく記されている。この地  
方の肝煎（江戸時代の村役人）であった宗九郎は  
1858年（安政5年）に石碑を建てたが、この石碑  
はその後忘れ去られていた。1918年（大正7年）  
6月に富山県立高岡高等女学校（現在の富山県立  
高岡西高等学校）教諭の松居巖夫（1869～1939、  
専門は国文学・漢学）がこの石碑を発見し、同僚  
の御旅屋太作（前述）と共にこれを保存する活動  
を行なった。なお、御旅屋も『『つまま』は如何  
なる樹木なりしかにつきては古来不詳とありしも、  
余は大正七年海辺植物採集の途次、同地古老の言  
を聞き『たぶのき』（一名イヌグス）なるを知る。  
安政五年肝煎宗九郎氏歌碑を建て『たぶのき』を  
以て歌中の『つまま』なりとして紹介せりといふ』  
と述べている（御旅屋，1932）。なお、『安り蘇の  
廻り』（嶋尾・吉川，1940）によると、都萬麻の  
石碑を建てた肝煎の宗九郎は、太田村大畠に居住  
し、地名から姓をとって大畠宗九郎と称し、明治  
の始め60余歳で没したとある。

タブノキ説は、松居が歌誌『心の花』にこの一  
件を発表したことにより改めて再考されることにな  
り、定説となった（鴻巣，1934 a）。ただし、  
『心の花』に掲載されたという松居の著作がどの  
ようなものなのか不明であるため、本報文ではタ  
ブノキ説に関して確認しえたもっとも古い文献で  
ある山本（1926）を本説の初出文献とみなした。

進野もその著作（進野，1937，1973）の中でタ  
ブノキ説を支持し、別名などについても整理した。  
そして、大伴家持によって詠まれた「都萬麻」と  
タブノキの特徴が、植物学的に一致することを述

べた。

戦後に「都萬麻」を扱った文献のほとんどはタ  
ブノキ説に基づいて書かれたものであり（例えば、  
富山県立新湊高等学校，1954；松田，1958 a，  
1958 b，若浜，1959；松田，1966；進野・大田，  
1966；澤瀉，1968；小村，1968；松田，1970；倉  
田，1973；松田，1976；能坂，1981；山口，1985；  
扇畑，1986；片山・武部，1987；武部，1990；塩  
谷，1994b；山田・中嶋，1995；大貫，1998；塩  
谷，1999；霜野，2000；佐竹ほか，2003；大貫，  
2005；高岡市万葉歴史館，2007；小野，2007，  
2010；小見山，2010）、現在では定説化している。  
ただし、『万葉集事典』（佐佐木，1956）では4つ  
の説（タブノキ説、ハマヒサカキ説、イヌツゲ説、  
ツタウルシ説）がほぼ対等に紹介されており、和  
田徳一（前述）はマツ説（曾，江戸時代後期）を  
支持した（和田，1966）。

#### 進野の研究を引用した著作物

長井（2001）には、万葉植物に関する進野の論  
文（進野，1937）は「今でも万葉植物を研究しよ  
うとする人の必須の文献として高く評価されてい  
る」とある。しかし、実際に進野の研究を引用し  
た文献は我々の知る限り表4の通りであり、非常  
に少ない。なお、『植物の名前の話』（前川，  
1981）では、明らかに進野（1937）の内容が引用  
されているが、引用文献欄に進野の論文は挙げら  
れていない。また、須河（2006）では、著作物の  
引用ではないが、新産地となる利賀村百瀬川のア  
シツキノリを1969年に進野が同定したことが述  
べられている。

表4 進野の研究を引用した著作物

引用した文献	引用の内容	引用された文献
重杉（1958）	アシツキノリの参考文献として	進野（1937）
水上（1999）	アシツキノリの生態	進野（1937，1973）
小野（2010）	万葉集の動植物関係諸論に関する文献として	進野（1937）
藤田（2013）	アシツキノリの生態	進野（1973）



## 考察

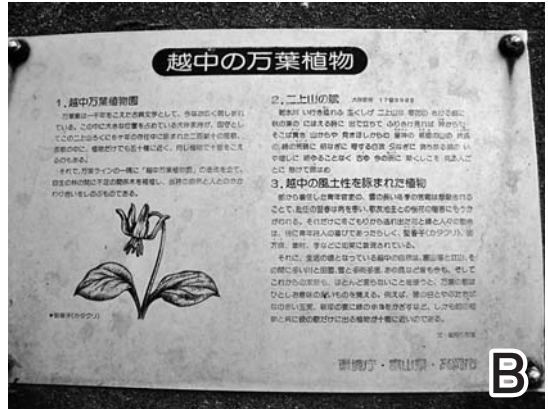
進野は越中の万葉植物の研究に関しては自他ともに認める第一人者であった(長井, 2001)とされるが、彼が万葉植物について具体的にどのような研究をしたのかは明確にされておらず、後の研究者による再評価もなされていなかった。そこで、以下に、万葉植物研究に関する進野の貢献について考察する。上述したように、『万葉集』において越中で大伴家持が詠んだ植物である葦附、堅香子、および都萬麻は現在のどの植物種と対応するのかが不明であったため、古くから諸説が提唱されてきた。この点に関して、本調査により、進野は新しい説を提唱することはなく、従来の説、特に鴻巣盛広が認めた説(例えば、鴻巣, 1934 a)の妥当性を検証するにとどまっていたことが確認された。したがって、今日から見て、万葉植物研究史上の進野の貢献は傑出したものとはいえない。

ただし、鴻巣が認めた説は現在も定説として広く受け入れられており、進野はこれらの説を否定して新説を提唱する必要がなかったともいえる。

鴻巣は、『万葉集講座第2巻 研究方法篇』(佐佐木信綱・藤村作・吉澤義則監修)の中で「万葉集の植物」を担当している(鴻巣, 1933)ことから万葉植物に関する造詣は深かったと考えられるが、植物学の専門家ではなかった。したがって、鴻巣が認めた説は進野により植物学的に裏付けられたといっても良いかもしれない。現在のどの植物種と対応するのかが不明だった葦附、堅香子、および都萬麻の3種すべてについて植物学的な観点から執筆したのは進野が初めてであった。植物分類学・生態学に基づいて考察を行ない、さらに富山県においてこれら3種が現在どのように分布しているかを調査した点こそが進野の万葉植物研究史上の貢献であったといえる。つまり、進野の



A



B



C



D

図4 二上山万葉植物園。A：入口、B：万葉植物に関する解説プレート、C：フジ *Wisteria floribunda* の解説プレート、D：ヤブツバキ *Camellia japonica* の解説プレート

オリジナリティーは越中万葉植物に関する実地での植物学的アプローチであったといえよう。

進野の論文(進野, 1937)では、それまでの知見が要領よくまとめてあるため、万葉植物研究の基礎文献として便利である。したがって、後進の研究者の多くは、おそらく進野(1937)を参考にしながら研究を進めたものと推測される。しかし、進野の著作は、小野(2010)以前の古典文学者によって引用された例がなく、万葉学者の世界では忘れ去られた存在だといっても過言ではない。

進野は、万葉植物の研究のみならず、その教育普及活動にも尽力した。進野は、富山県文化財保護審議会委員としてアシツキノリの天然記念物指定にも関与し(進野, 1976b)、調査研究はもとより保護施策の指導のためにもアシツキノリ産地を度々訪れ、時には植物採集の講師をすることもあった(中田地区葦附誌編纂委員会, 1976)。進野はまた、二上山万葉植物園(図4)の建設に携わることで、万葉植物の教育普及活動に大きく貢献した。高岡市の二上山の中腹標高215mの「前の御前」山に自生している万葉植物に約50種類の植物を補植した二上山万葉植物園(面積:約1万㎡)の建設は、進野の指導によるものであり、万葉植物に関する多くの解説文(図4b-d)も進野による。これは、万葉植物に関する幅広い知識が不可欠な仕事である。

進野は、自らも和歌を詠み、万葉集のみならず様々な古典文学に造詣が深く、それらを著作に引用することも多かった。進野は植物学に限定されない幅広い教養を備えた人物であったから、植物学と古典文学の両方の視点から総合的に万葉植物の研究および教育普及活動を行なうことが可能であったと考えられる。

### 謝辞

文献を賜った富山市科学博物館の太田道人学芸員と富山県立新川みどり野高等学校の佐藤卓博士、文献調査でお世話になった射水市の大野豊氏、富山県農林水産総合技術センター水産研究所の大場隆史博士、富山県立図書館、射水市図書館、草稿を読んで有益なご意見をいただいた富山県衛生研

究所の品川保弘博士、および写真の使用を許可して下さった(有)ガイドコーポレーションの大塚あつ子取締役にお礼申し上げる。本原稿を執筆するきっかけは、高岡市万葉歴史館を訪れた際にボランティアの女性から越中万葉に関してさまざまなご教示を賜ったことである。ここに明記し、ご厚意に感謝したい。

### 引用文献

- 著者、成立年共に未詳. 万葉集名物考.  
\*荒木田嗣興, 1834. 万葉品類抄.  
遠藤吉三郎, 1911. 海産植物学. 博文館, 東京.  
藤田富士夫, 2013. 『万葉集』「葦付」歌についての野外からの一見. 野外調査研究所報告, 19/20: 55-63.  
郷右近忠男, 2003. 再び家持卿の詠める堅香子について. 日曜随筆, 48(10): 19-24.  
堀 勝博, 2002. 「堅香子」考. 東洋文化(町田・無窮会), (88): 12-25.  
市島宇八, 1929. あしつきのり調査予報 附 あしつきノ学名ニ就テ. 富山県水産講習事業報告, (昭和2年度): 149-160.  
市島宇八, 1976. あしつきのり調査予報 附 あしつきノ学名ニ就テ. pp.16-28. 葦附誌(中田地区葦附誌編纂委員会編). 中田地区記念物保存会, 高岡.(市島, 1929の再録)  
\*鹿持(藤原)雅澄, 1898. 万葉集古義品物解.  
\*賀茂真淵, 1768頃a. 万葉集卷十七之考.  
\*賀茂真淵, 1768頃b. 万葉集卷十九之考.  
賀茂真淵, 1903-1906. 賀茂真淵全集 第3(国学院編集部編). 吉川弘文館, 東京.(賀茂, 1768頃a, 1768頃bの再録)  
片山 武・武部弥十武, 1987. 東海北陸の万葉鑑賞. 和泉書院, 大阪.  
\*契沖, 1690. 万葉集代匠記.  
菊池勘左衛門, 1977. 各会長の思い出. 会誌(富山県生物学), 16/17: 1.  
清田秀博, 1967. 『葦附』についての私考-川モヅク説に関する一感想-国語国文学研究紀要(富山県立富山高校), (7): 1-7.  
清田秀博, 1969. 家持の用字から考える問題-久

- 良之・伊夜彦・水松之類について－研究紀要（富山県高等学校教育研究会国語部会），（8）：11－17.
- 清田秀博，2005. 越中万葉地名雑考. 桂書房，富山.
- 小泉源一，1919. 葦附苔. 植物学雑誌，33：263－264.
- 小見山輝，2010. 一首の背景（379）. 龍（龍短歌会），79(9)：52.
- 小村昭雲，1968. 原色万葉植物図鑑. 桜風社，東京.
- 鴻巣盛廣，1933. 万葉集の植物. pp.413－439. 万葉集講座第2巻 研究方法篇（佐佐木信綱・藤村作・吉澤義則監修），春陽堂，東京.
- 鴻巣盛広，1934 a. 北陸万葉集古蹟研究. 宇都宮書店，金沢.
- 鴻巣盛広，1934 b. 万葉集全積第五冊. 大倉廣文堂，東京.
- 倉田 悟，1973. 巨木物語－3－ 越中の都万麻. 中央公論，88(12)：280－283.
- 畔田翠山，1843. 古名録.
- \*前川文夫，1973. カタカゴの正体. どんめん，（1）.
- 前川文夫，1981. カタカゴの正体. pp.70－78. 植物の名前の話. 八坂書房，東京.（初出は1973年の『どんめん』1号）
- 政枝，1985. 父の思い出. 富山教育，（747）：6－7.
- 松田 修，1934. 万葉植物新考. 春陽堂，東京.
- 松田 修，1958 a. 万葉未詳植物考 五－つままとねつこぐさ－ 短歌，5（2）：102－107.
- 松田 修，1958 b. 万葉の花 改訂重版. 芸艸堂，東京.
- 松田 修，1966. 万葉の植物. 保育社，大阪.
- 松田 修，1970. 増訂万葉植物新考. 社会思想社，東京.
- 松田 修，1976. 古典の花－植物文学研究とエッセイ. 蝸牛社，東京.
- 松永公英，1988. 葦附考－近代における越中万葉研究に関する考察－伊美都川：大伴家持卿顕彰会誌，（3）：24－31.
- 水上哲夫，1999. 高岡市中田地区のアシツキの生育状況と生育環境. 富山の生物，（38）：87－91.
- 森 淳司，1984. 越中万葉の植物. pp.79－96. 大伴家持と越中万葉の世界. 雄山閣出版，東京.
- 長井真隆，1994. 進野久五郎. p.947. 富山大百科事典 上（北日本新聞社編）. 富山大百科事典編集事務局，富山.
- 長井真隆，2001. 植物標本と花を愛でる心を遺した進野久五郎. 越中人譚，（36）：11－14.
- 中田地区葦附誌編纂委員会編著. 1976. 葦附誌. 中田地区記念物保存会，高岡.
- 日本国語第二版編集委員会ほか，2001. 日本国語大辞典 第二版 第十二巻. 小学館，東京.
- 能坂利雄，1981. つまみ雑考－万葉の周辺－. 氷見春秋，（3）：1－9.
- 大場秀章，2007. 植物文化人物事典－江戸から. 近現代・植物に魅せられた人々. 日外アソシエーツ，東京.
- 扇畑忠雄，1986. 家持の樹木信仰－「つまま」「ほよ」をめぐる－万葉研究（仙台万葉研究会），（7）：1－6.
- 岡村金太郎，1936. 日本海藻誌. 内田老鶴圃，東京.
- 澤瀉久孝，1967. 万葉集注釈第十七. 中央公論社，東京.
- 澤瀉久孝，1968. 万葉集注釈第十九. 中央公論社，東京.
- 重杉俊雄，1958. 風土富山. 清明堂書店，富山.
- 小野 寛，2007. <万葉集「ことば」考（282）> 「つまま」コスモス，55（6）：11.
- 小野 寛，2010. 万葉集をつくった大伴家持大事典. 笠間書院，東京.
- 小野 寛，2013. コレクション日本歌人選042 大伴家持. 笠間書院，東京.
- 大貫 茂，1998. 万葉植物事典. クレオ，東京.
- 大貫 茂，2005. 万葉集植物事典 普及版. クレオ，東京.
- 太田道人編，1987. 進野久五郎植物コレクション. 富山市科学文化センター，富山.
- 御旅屋太作，1922. 庄川産葦附苔. 富山県史跡名勝天然記念物調査報告，（3）：15－20.

- 御旅屋太作, 1932. 片々録. 富山県史跡名勝天然記念物調査報告, (12): 53-54.
- 坂本信幸, 2013. 堅香子の花. pp.88-89. 万葉集をたどる 60首で知る大伴家持がみた、越の国 (高岡市万葉歴史館編). 笠間書院, 東京.
- 笹原克彦, 2003. 進野久五郎・菊池勘左エ門 (富山県の動植物研究に力を尽くした人々). pp.31-32. とやまの教育を築いた人々. 富山県教育記念館, 富山.
- 佐佐木信綱, 1956. 万葉集事典. 平凡社, 東京.
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之, 2003. 万葉集四 新日本古典文学大系. 岩波書店, 東京.
- 仙覚, 1269頃. 万葉集註釈.
- 霜野仁一, 2000. 越中万葉における植物詠歌考 (上): 大伴家持の歌をめぐる. 富山女子短期大学紀要, 35, 11-28.
- 霜野仁一, 2001. 越中万葉における植物詠歌考 (下): 大伴家持の歌をめぐる. 富山短期大学紀要, 36, 1-22.
- 嶋尾正一・吉川正文, 1940. 安り蘇の廻り. 自費出版, 富山.
- 進野久五郎, 1929. 天狗平化石層. 杉原村明治会, 富山.
- 進野久五郎, 1936. 越中天然記念物解説. 郷土研究, (2): 1-19.
- 進野久五郎, 1937. 万葉植物 葦附・堅香子・都萬麻. 富山師範学校交友会誌, 29: 1-9.
- 進野久五郎, 1940. 越中における方言と民間療法 火傷 霜焼 ものもらひ しゃくり. 富山師範学校交友会誌?: 1-11.
- \*進野久五郎, 1957. 得がたい先輩である. 佐渡博物学会誌, 1.
- 進野久五郎, 1960. 富山県の植物 陰花植物. 教育広場, (110): 14-15.
- 進野久五郎, 1971. 家持と越中の植物. pp.391-397. 越中の万葉. 北日本新聞社, 富山. (進野, 1937の再録)
- 進野久五郎, 1973. 富山の植物一風土と四季を訪ねて. 巧玄出版, 富山.
- 進野久五郎, 1976 a. 家持と越中の植物. pp.10-14. 葦附誌 (中田地区葦附誌編纂委員会編). 中田地区記念物保存会, 高岡. (進野, 1937の部分的な再録)
- 進野久五郎, 1976 b. 西広上の葦附苔の指定について (抜すい). pp.194-196. 葦附誌 (中田地区葦附誌編纂委員会編). 中田地区記念物保存会, 高岡.
- 進野久五郎, 1980 a. 菊池 (勘) 先生の忘れられない思い出. 会報 (富山県生物学会), (20): 3-6.
- 進野久五郎, 1980 b. 得がたい先輩である. pp. 31-33. 菊池勘左衛門 (菊池三郎編). 自費出版, 両津. (進野, 1957の再録)
- 進野久五郎・大田 弘, 1966. 氷見一伏木海岸の植生と分布. 氷見海岸二上山学術調査書. 富山県, 富山.
- 塩谷佳和, 1994 a. かたかご. p.241. 富山大百科事典 上 (北日本新聞社編). 富山大百科事典編集事務局, 富山.
- 塩谷佳和, 1994 b. つまま. p.241. 富山大百科事典 上 (北日本新聞社編). 富山大百科事典編集事務局, 富山.
- 塩谷佳和, 1999. 万葉集に詠まれた植物を訪ねて一 あしつき、かたかご、つまま、ほよ一. とやまと自然, (85): 2-5.
- 白井光太郎, 1933. 樹木和名考. 内田老鶴圃, 東京.
- 曾占春, 江戸時代後期. 國史草木昆虫攷.
- 須河隆夫, 2006. 南砺市五箇山地方におけるアシツキ (葦附) の観察. 富山の生物, 45: 33-35.
- 武部弥十武, 1990. 越中万葉の動植物 富山工業高等専門学校紀要, 24, 100-106.
- 田邊武松, 1942. 越中万葉かたかごの花. 自費出版, 富山.
- 高島 順, 1976. アシツキノリと類似のソウ類. pp.255-261. 葦附誌 (中田地区葦附誌編纂委員会編). 中田地区記念物保存会, 高岡. (高島, 1951の再録)
- 高松正七郎, 1985. 心に残ることば. 富山教育, (747): 17-18.
- 高岡市万葉歴史館編, 2007. 越中万葉百科. 笠間

- 書院, 東京.
- 富山県立新湊高等学校編, 1954. 越中万葉研究序説. 自費出版, 新湊.
- \*豊田八十代, 1931. 万葉集植物考.
- 経沢信弘, 2013. 葦附のカワモズク説について. 野外調査研究所報告, 19/20: 64-69.
- 和田徳一, 1966. 越中万葉植物考. 富山女子短期大学紀要, 1: 27-63.
- 和田徳一, 1967. 「葦附 水松之類」私考. 萬葉, 17: 53-56.
- 和田徳一, 1976. 越中万葉植物考. pp.104-113. 葦附誌 (中田地区葦附誌編纂委員会編). 中田地区記念物保存会, 高岡. (和田, 1966の再録)
- 若浜汐子, 1959. 万葉植物全解. 潤光社, 東京.
- 山田卓三・中嶋信太郎, 1995. 万葉植物事典 万葉植物を読む. 北隆館, 東京.
- 山口 博, 1985. 万葉の歌一人と風土 (15). 保育社, 大阪.
- 山本章夫, 1926. 万葉古今動植正名. 内外出版, 京都.
- 山本正江・田中伸幸編, 2005. 牧野富太郎植物採集行動録 昭和編. 高知県立牧野植物園, 高知.
- 山内健生, 2013. 大塚外次 (1913~1961) —富山県ゆかりの忘れられた動物学者—. 富山の生物, (52): 149-159.
- 屋代弘賢, 1907. 古今要覧稿 第5巻 草木部下. 国書刊行会.
- Yoneda, Y., 1939. Cyanophyceae of Japan, IV. Acta Phytotaxonomica et Geobotanica, 8 (1): 32-49.
- 米山 讓, 1985. 進野先生—その青年期、壮年期、そして老年期—. 富山教育, (747): 7-8.
- \*間接引用

#### 引用ウェブサイト

富山の科学教育バーチャル資料館 (<http://scicom.edu.u-toyama.ac.jp/~htymscied/index.html>)